

川柳雜誌

第一卷第九號



川柳雜誌 第一卷 第九號 (大正十三年十月十五日發行) 目次

民謠ぶり

川村花菱 (五)

選及び選者 (三)

麻生路郎 (六)

質疑應答

遅日莊主人 (三)

近作柳樽

路郎選 (三)

募水枕 (附水枕)

石井省二選 (六)

集燕

白石維想穗選 (九)

句半襟

柳川洲馬共選 (二)

本社九月例会 (柳珍堂) (一)

柳川洲馬共選 (二)

第九支部句會 洲馬報 (六)

第一支部句會 蘆穂記 (三)

川柳塔

遅日莊偶會 (五)

助六、雅幽、かほろ、一洲、柳路、輝翠、徹底郎、莢豆、夜調、二柳子、柳骨、蘆穂

川柳書架

竹馬居句屑 石井省二 (三)

後 (表紙畫自刻) 柴谷柴舟

編輯後記 竹田蘆穂 (三)

近作

麻生路郎 (一)

近作 麻生路郎

蒲團から七分出てきく國のこゝ
新世帯客座蒲團の柄に凝り
女房の不平は釣瓶繩にあり
資本家であつたは父の父の代
さればこて一升米も買へまいが
税金ミ子を學校にやるこゝ



民謡ぶり

川村花菱

八月の十三日、私は芝居の用で關西線で名古屋へ来た。そして、その夜十時、名古屋に着く汽車で私の家内三子供が東京の家へかへるので用を済ました明るい氣持で、停車場で家のものに會ふ事を楽しみにして居た。家のもの共も、そんなに楽しみにして居たか分らない。所が用事は案外長くかゝつて、その夜の九時半頃、やう／＼最後の決定を見て、私の心持は極めて明るいものになつた。すぐに車を命じて、新守座を出たのが十時十三分程前

十分あればいゝね。

不丈夫です。

ミ車夫は、ぶつたが年よりの故か車は一向に走らない。氣が氣でないので、車の上で足をばたく／＼させながら止まるやいなや停車場の中に走り込んだ。さう列車は来て居た。子供がさぞ

さがして居るだらうと思ふきたまらなくなつて、大急ぎで、入場券を買はうとするさ、あひにくさ五錢がない。十錢出すさお釣がありません云ふ。汽車が来て居るんですが——頼んでも、いけません云ふ。相手は若い女だつた。私は争ふ氣にもなれずに、さつそくの智慧で、一枚買って、飛び出さうとするさ、列車は靜かに動き出して居た。

もう見ても何も見ぬない。首を出して居るかと思つても、プラットホームの柱にチラ／＼ささへぎられ、夜の暗さにそれらしいものは見ぬないで、只眼の前を通る最後の三等車に、白衣の富士講の連中らしいものが、チラ／＼ささへぎつて見ぬた。私は黙つて立つて居たが、列車が全く見ぬなくなるさ、思はず深い息をついた。

これが、もつ／＼意味の深い別れだつたら、そんなに口惜

い事だつたらう。

こんな事を思ひながら、私は又車で元来た方へ引きかへして宿屋へ着くなり、その時の心持ちを、買った入場券を封じ込んで、東京の家へ手紙を書いた。あまで聞いたはなしに依れば子供二人が

お父さん、お父さん。

三汽車が、全く闇の中に這入るまで呼んで居たそうだったが私の心持ちは、本當にさびしい悲しいものだつた。

翌十四日、私は又大阪へ行かなくてはならなかつた。何さなくうるんだ心、八月云つても、もう朝なごは秋らしい風が吹く——私は本屋の店に『雨情民謠百篇』と云ふ書物を見て、一度その時の自分の心持にふさはしいものゝ一つとして、すぐにその一本を手にとつた。

汽車の中で読んで行く中に、歌はのこらず私の胸にふれた。

私も川柳がよみたくなつて、ゆられながらその本にいろ／＼と出鱈目をかきつけた。夕方大阪の驛に着いた。ミ、芝居は、あまり成績がよくないので、豫定より一日早く、十四日に打ちあけて歸京する事になつたので、君の所へ電報を打つた所だミ云ふさわぎで、落つく間もなく私は離務の生活に没頭して、十五日一座五十餘人の人を立たして、私は實家に深澤恒造君の病氣を見舞ひ、それからすぐに京都へ来た。

その夜、私は祇園から丸山公園、智恩院から動物園の方まで歩いて、翌日は日活の撮影所へ、私の作の「鳥のあはれ」の試寫を見に行つた。ミ、池永所長に招かれて四條のゆかで大文字を見物し、翌日は南座で久しぶりの文樂の淨瑠璃を聴いたりして、京都の三日は夢のやうに過ぎて仕舞つた。

十九日に歸京して、それから、九月の名古屋の芝居の稽古をして、廿八日に出發して廿九日に名古屋へ着いたが、三十一日の初日の夕方、最も將來に望みを囑して居た、白鳥駒子が京都の病院で死んで仕舞つた。廿八日に名古屋へ来るつもりで、残らず用意をした。廿七日からの發病で、漿液性腦膜炎と云ふのであつたが、私は初日の多忙さにまぎれ、親父さんから来る、アヤコキトクシラセル。イマイキヒトツタ。の至急報を、そのまゝシャツの衣囊に仕舞込んで、黙つて仕事をしてゐたが、ふさしたあひ間に劇壇の表を見るに、彼の名の染たのほりが、風にはためいて居るので、私はもうたまらなく悲しくなつた。

私はかなり長く芝居の仕事をして、これまで、かなりいろ／＼の悲しい事にも出會したが、此度のやうに無情を感じた事は一度もない。八月の頃から、私の作劇上の信念に動搖を來たして居るのミ、もう一つ、あまりミ云へば無理解ミ粗野な俳優に愛憎が盡きたので、人間座を止めるミ云ふ意志を發表したが、そうでなくても、私には止のずには居られなくなつた。まだ誰

にも云はない中に、成川浪々子に電報を見せるに『ウン！』と云つたなりだまつて居たが

怎うする？

菩提の爲にも、芝居はもうやめるよ。

そうだ、それがいゝ、そうし給へ！そうし給へ！

浪々子は慙う云つた。そんな風で、九月を限り人間座に離れる事にするに、森英治郎氏も止め、浪々子も止め、震災後から過去一年苦勞した人間座はさうく亡びて仕舞ふ事になつた。

永い間の離役から全く放たれたある日、私は愛知病院に深澤君を訪ね、それから、樂天地に這入つた。ミ、丁度夕方で、見物は極めて妙かつたが、中庭の鳥籠の中に、孔雀が一羽死んで居た。たつた今死んだので、あらうか、胸の毛が秋風に吹かれて居た。孔雀の死！私は、それをじつと見つめて居たがやがて、はじまつたオペラの合唱に私の冥想は破られて仕舞つた。

.....

十月五日、私は本當に落つた氣持で机に向つた。そして、

その民謡百篇を手にして見るに、書きすてた句に、當時の思ひ出をむすびつけるに、忘れられないものが数々ある。私は、民謡の題に、私の句を書きならべるが、幸にも、もし雨情氏の民謡を讀み比べて下さる方があれば、こんなうれい事はない。

紅殻さんほ

赤さんほ 彼岸に紅い帯で来る
赤さんほ 娘のやうな帯で来る

橋の上

吸ひがらを流れて投けてじつと見る

捨てた葱

しみくくミ 秋空見れば涙が出る
葱のかほりに冬の黄昏

女をすて、世をせまくする

ふり棄てられて氣が樂になる

門司にて

江戸兒は故郷の無いをさびしがり

船着場 眠つきのわるい人に會ひ

竹藪

籾のいきれに童貞の夏

夜あけ星

只一つありと思ふ星二つあり三つあり

眠子菜

夙川の夜は蛙に明け暮れる

朝霧

地理で教はるロンドンの霧

青いすゝき

薄の穂天鷲絨に似た味が
あり
薄野へ来て『落人』を口ずさみ

粉屋念佛

只夜更云ふがうれしい一ト盛り

波浮の港

お前それでいのか試き度い女の心

海の遠く

只一人生きるに胸を抱きしめる

洪水の跡

出水の跡にコスモスの花

謎

云ひ出して仕舞へば戀のあつけなさ

はぐれ鳥

だまされた事を忘れるさびしさよ
だまされた娘は母に抱きすがり

日永

指下土いちつて居れば消れて行き

お茶師

茶を淹れる娘の手許覺束な

草薙り娘

草薙れば鎌に音ありひゞきあり

道樂藥師

二人共同じ心で居て別れ
話し合へばまごまる二人ふご別れ

蚊喰鳥

蝙蝠が不良少年らしく飛び
蝙蝠を捕へらく悲しくなつた子供の思ひ出

また来よつばめ

停車場の軒につばくろ舞ひ遊び

千代の松原

そむけ云ふも戀の云ひつけ

背戸山

理智云ふづるさ狐の眼に見ゆる

飛驒にて

もつこノ自然が親切だと思ふ子供の秋

米山小唄

東京を賣る氣よつほきほれちまい

旅の身ぢやにて

ころび寝に理屈をつけただけ弱い
さばくこした湯女のあいさつ

出船

船云ふものは悲しい一つなり

いミツの虫

こほろぎはいつでも歌を云ひきらす

千羽鳥

ふさ何處の人ぞ思ふ母の顔

わたしや黒猫

薦のつる浅間しいまでさがりつき

同じ國なら

急行車臺灣に行く人に會ひ

春降る雪

先づ足袋を脱いで重ねた亂れかご

せはしない人ミ帶止口へ取り

萱の花

嘆く女の帶の印籠

風に吹かれて

唐詩選秋にや木の葉は落るもの

一軒家

母親が見れば男がにくらしい

白露虫

女から今死に想な文が来る

雁

四十になるが秋はさびしい

濡れ乙鳥

人から見れば人の世の中

つばめから見ればつばめの世界なり

西瓜畑

西瓜の蚊殺せば西瓜なりひつき

昔の月

十五夜を此處幾年か見はぐらし

歸らぬ人

二人して見れば皆よし美し

楡

がま口を女が落すまでふざけ

刺

兄妹にならうミ二人泣き別れ

いつでも會へると思つたにそのまんま

鏞

忍びがへしにさびついた釘

眼を上げて見れば根のない雲が浮き

夕の月

待ちあはす氣はのろくミ仕度くなり

女工吹

公休日ボカンミ下ろすさらの下駄

柳珍堂忌

於九月六日
端の坊

◇ 松村柳珍堂は大正八年九月十四日池田城山に寓居に物故した柳壇の鬼才であります。俳句では千規門の大家で鬼史と號しました。晩年は全く川柳家として終始し、「北の空より我に迫りては消の去り」の辭世句を残しました。句言當夜路郎氏から故人についてお話がありました。(幹事)

路郎 古城山 五葉 莢豆 助六 長人 琴月 松雨 徹底郎 悠々 蚊十 梅風
かほる 馬歩 笠人 眠聲 竹榮 光太樓 刀三 百石 馬行 凡平 双柳 柳骨
秀哉 駒入 廣賀 彩霞 一休 紋太 溪花坊 水府 日車 半文錢 (來會者名
簿より)

空 (兼題) 路郎選

黒雲が出て折角の握り飯 松雨
親の恩分つたさいふ旅の空 双柳
天上をしたが雲雀を見失ひ 乾坤
空を見る辭を看護婦たしなめる 悠々
世話方は空を見てからパスを出し 笠人
青空のはすれに蜘蛛の巣がかかり 高歩
悲しみを空はそしらぬ様に晴れ 百石
井戸替の底から青い空が見え 凡平
いい月夜抱いた子供に空を指し 彩霞
空へ行く様に太平洋の船 徹底郎
生活に空は大きく見るはかり 半文錢

水上署ひからびてゐる空が晴れ 水府
時計臺雲動き居り動き居り 紋太
撮影が終る空の人となり 駒人
空模様見ながら母は歸らせる 同
弓なりに空の景色は眺められ 文久
空の色水の色人魚住み 同
人間のみにくさ空の澄みわたり 溪花坊
一寸空見に出るほごに酔は醒め 同
山の家空へ思ひの丈をのべ 日車
枕から手摺へ空は曇り初め 同
明日もまた鰯がされる空になり 長人
洋畫家の空にするまで塗つぶし 同

物干を降る最後は空を見て 同
遠くて廣いだけ見らるゝ空 莢豆
空もまた思案のつかぬ顔を見せ 同
朽らた縄でもよい空を降り来い 同
一刷毛の空見て流す涙なり 路郎
この空へ時々虹もかかります 同

荷造 (席題) 五葉選

荷造の繩のまに／＼手は動き 半文錢
荷造を旦那は一つやつて見せ 刀三
注意札つけて荷造しまひなり 秀哉
荷造の門へ懸取やつて来る 竹榮
片足で抑さへ荷造返事する 光太樓
荷造の邪魔になつてる近所の子 長人
荷造の中を先生通される 悠々
大丈夫いふ荷造をたしなめる 文久
荷造の横を漸く下女は抜け 彩霞
荷造りの埃から猫は追ひ出され 助六
荷造のさしづに丁稚舌を打ち 松雨
此分は東京へ行く繩をかけ 徹底郎
荷造さなるおつさん口を出し 路郎
頬杖で旦那荷造見てるなり 一休
荷造の跡へ奇麗に水を撒き 同

鉢巻を取らるゝ荷造しまいなり 同

五 客

荷造の薙へ吹雪かゝるなり 刀三

荷造へ雲がおかしうなつて来る 光太横

荷造の繩を集めて今日も暮れ 水府

荷造をさら／＼さつ／＼掃いて暮れ 馬行

カン／＼を横に荷造出来上り 同

荷造が出来て自動車音を立て 馬行

荷造の影も本町晝こなり 水府

荷造の繩に女中はけつまづき 悠々

荷造の側の埃が風に舞ひ 五葉

後向く姿に罪の指がふれ 日車

家出した子に罪つくる女親 竹榮

罪なこゝ女將は云つて聞かす 刀三

且さんの耳へ女將の罪なこゝ 笠人

見返れば我半世も罪ばかり 馬行

敵方に心底聞けば罪さいひ 百石

ほんさうの母を知らない被告り 光太樓

父なし子泣いて歸るも母の罪 梅風

悟つてから罪さいふ字を軽く見る 莢豆

死刑囚名残惜しさの夜が白らみ 彩霞

これしきのこゝに女中は泣いて詫び 徹底郎

罪を犯してまで出世を急ぐなり 松雨

有罪さ決まつたその日兄が来る 駒人

氣の弱い男の罪をあはれがかり 紋太

息子には替へられぬ下女をさし 路郎

人のする事して居るに罪にされ 馬行

宿帳 (席題) 互 選

宿帳に飯粒一つつけて来る 古城山

宿帳にまた平民書かされる 莢豆

宿帳に馴れた手つきも藥賣 双柳

宿帳へ女將は恐れ入つた様 柳骨

宿帳の代筆させて飲んで居る 悠々

宿帳へいつもの流で軽く書き 長人

宿帳に嘘を残した二人連 梅風

宿帳に相談をする睦じさ 笠人

字の巧いのは官吏書き 鷹歩

宿帳へ巡査しばらく無言なり 蚊十

宿帳を繰つて管状を書いて居る 刀三

宿帳に偽名が残る費消者 竹榮

俺だけでない宿帳の二人連 文久

前科者宿帳手にして考へる 一休

お名染の宿帳帳場の方で書き 助六

寝轉んでる宿帳に書き馴れる 溪花坊

宿帳を記つてかしわをこゝろ決め 五葉

宿帳へ妹さ書くも哀れなり 百石

宿帳へ久方振りの筆を持ち 同

宿帳へ亭主笑ひつゝ入字 秀哉

宿帳へ警官役目だけを見る 同

宿帳を返した後を横になり 馬行

宿帳へ書いて重荷か下りたやう 同

宿帳をつけてのんびり湯にひち 同

宿帳を待つ番頭の世辭のよさ 同

宿帳が濟んで大切な客にされ 同

宿帳に十年前を云ひ添わる 同

宿帳へ大阪辯酒落を云ひ 凡平

宿帳が仲居すら／＼讀めるなり 同

宿帳へ番地はつきり書いて置き 同

宿帳の序に下女の事を訊き 光太樓

宿帳へ分らぬ乍ら褒めて居る 同
 宿帳が来て電燈の暗いこゝ 同
 宿帳へ私服一人が先づ走り 同
 宿帳で朝鮮人云ふが知れ 同
 陶然として宿帳の字がかすれ 同
 宿帳の細字文字は下女を連れ 同
 宿帳は茶菓子のあこへ持て来る 同
 外交は宿帳つけらこゝに刷れ 同
 宿帳は奉公主のこゝを書き 同
 宿帳に番頭低う控へたり 同
 湯上りへもう宿帳をつきつける 同
 宿帳が煙草の用も聞いて去に 同
 宿帳へ無職さかいた達筆さ 同

隣 (席題)

互選

隣から聞ゆる三味にちつみ酔ひ 松雨
 物干で挨拶をするいい天氣 彩霞
 鼻唄で隣の息子今歸り 梅風
 隣から跳足で飛んで来る用事 秀哉
 出勤の後へ隣の子供来る 悠々
 お隣の子供が悪い癖をつけ 竹葉
 お隣が死んで母親氣にかゝり 蚊十
 獅子舞は隣まで来て去んじまい 鳶歩

留守です隣の人が返事する 長人
 日曜日隣へ頼むこゝが出来 刀三
 お隣の時計も今日は遅れて居 柳骨
 お隣もなく安泰にあらせられ 徹底郎
 隣の子溫和しいのに泣いてゐる 五葉
 隣の鈴またお隣ご間違へる 馬行
 お隣も今日久し振り風呂で遇ひ 同
 お隣の音聞きながら宵寝なり 同
 隣の子優等賞を見せに来る 凡平
 隣から亭王の好きなものを呉れ 同
 靴下を干し足袋を干し隣同士 水府
 隣から出勤いつも影がつき 同
 お隣へ裏から行つた里歸り 光太樓
 家移りをしてお隣の井戸を借り 同
 前垂れの下に隣へあけるもの 同
 隣から時計見に来る正午下り 助六
 お隣へ撒いてる水に禮を受け 同
 壁のすきからお隣見わたる 同
 隣から脚氣の連れが今日も来る 文久
 暇乞隣の人と交るなり 同
 尋ねる隣人は横を向き 同
 心易いやうで隣もの云はず 溪花坊

第一支部句會

荷車を置きに隣へ頼むこゝ 同
 看板を隣厚かましくも出し 同
 隣へは冷たく隔つ壁となり 半文錢
 隣隣のものは云はないその隣 同
 一軒家をはさんで雨隣 同
 まゝ母云ふお隣が氣にかゝり 路郎
 心ばかり隣の方も掃いて置き 同
 いつ起きて見ても隣は起きてゐる 同

八月二十六日築港託兒所階上に於て第一
 支部句會を催した、始めての出席者もあつて
 盛會であつた(声禮)
 參會者 溪花坊、松耶、光太樓、蕭流、蚊十、梅
 風、悠々、萌哉、文久、竹葉、かほる、駒人、刀三
 輝翠、二柳子、声禮

席題 星

互選

お茶ひいた其の夜の星の光る事 かほる
 星一つ飛んで夜道を急ぐなり 二柳子
 父親は星で日和を決めてゐる 蚊十
 切れ話流れる星へ指をさし 輝翠
 かくれん坊の鬼が見た流れ星 光太樓
 初旅の北國で見える星の數 松郎
 假埋葬星が流れる橋を越へ 同
 星明かり桔梗の花を見てちぎり 溪花坊

流れ星へ夜店の戻りらしい聲
避雷針針星をつき刺す様に立ち
洋館の屋根から星の空になり
同 同
同 同

席題 合羽 互選

母親に言はれて合羽持つて行き
行商に合羽の用意までが出来
合羽着たおつさん尻を裏けてる
雨合羽電車に乗つてゐる
喫ひ付けて合羽の裏が少し見
雨宿り合羽の人を斜に見る
地圖描いたやうに合羽へ皺がつき
小包の合羽に少し泥がつき
土山を越えて合羽をたゝんでる
合羽着て出て行く姿見送られ
母親の智慧は合羽へ包むこと
旅に出る合羽は四ツに八ツに折り
合羽着て忠義一途はひざまつき
同 同

席題 自殺 互選

あのこころがあつて自殺をしたらしい
自殺して婦人世界に喧し
自殺した線路上提灯二ツ見
山中で自殺してゐた尋ね人
竹 悠 駒 梅
葉 々 人 風

自殺した海は見えぬ風になり
世の中をあんまり狭く見た自殺
自殺した二階をみんな見て通り
自殺した言はず弔文讀み上げる
自殺した其の日牛乳呑んだだけ
自殺前後つじつま合はぬこと
自殺する程に約手の日が迫り
同 同

席題 テント村 本田 文久

入相の鐘も聞きたいテント村
鐘詰の空に躑ぐテント村
テント村又口濱があるらしい
テント村矢張り女の姿なり
テント村藪蛇にひざい腹を立て
テント村子供あんまり早く起き
テント村一人で歸る事が出来
テント村今夜は少し涼しすぎ
テント村今夜は少し涼しすぎ
テント村さつきの本を借り来る
テント村向ひのテント白く見
それ以来蟻を氣に病むテント村
テント村郵便局へほき遠ふし
煙突も立せず焚いてるテント村
テント村煙草の火子忍らい散り
光太樓 文久 松郎 刀三 光太樓 駒人 同 光太樓 かほろ 悠々 芦穂 松郎 輝翠

テント村空豆がちこ漏るなり
テント村大阪の灯と神戸の灯
テント村日の出るを寫される
同 同

兼題 買物 竹田 光太樓

お供した女中も櫛を買つて来る
仲のよい友と揃ひの柄を買ひ
兩替をする氣數島一ツ買ひ
氣に入つた品に正札見付からず
買物に女工の連れば門で待ち
次ぎ次ぎ出れ不如意な物を買ひ
公設の序に一つ頼まれる
買物を擴けて見るに少すぎ
買物に二人で出る新世帯
買物の柄を彼の女に見て買ひ
白靴は脇へ狭さるる物を買ひ
買物の歸り着物を値切つて見
あこの買物は届けて貰ふなり
汗の帯解いて買物擴けられ
買物に嫁の浴衣地らしい柄
同 同

五 容

前垂を取つて買物帳を提げ
松郎

買物を減けた紐に躓き 溪花坊
 素人目へ買物の値を訊いて見る 刀三
 頼れて行く買物は船に乗り 文久
 買物の襟に觸るゝも女なり かほろ
 (人)買物に一日亭主引つられ 蚊十
 (地)居候買物をして笑はれる しける
 (天)任されて値頃の物が見付 刀三

第九支部句會

八月三十一日天長の佳節を選んで、支部第一回句會を山口縣山口町森脇旅館大廣間に催す。席題は最終迄一題五分間締切の大車輪參會者、幸麿、遠柳、四迷子、蛙人、吐露坊、多賀助、洲馬の古顔、新進の凡槍、雪峯、八百長堤坊、遊郎、桂の十三名(洲馬記)

兼題 發展 多賀助選

北米は發展の芽を踏みにじり 遠柳
 發展をする様に言ふ土地會社 桂
 發展を裏から覗く探訪者 蛙人
 親展を發展に讀む摩女の文 洲馬
 發展はしたが市にはまだならず 八百長
 發展も衰頽もせず古物商 凡槍

發展に狹まる川の美しさ 四迷子
 ○
 發展をするが親類氣に入らず 多賀助
 湯上り 蛙人選

湯上りの目那ノンビリ下駄を履 遠柳
 湯上りへ涼み臺から何か投げ 多賀助
 暫くは禪で居る風呂上り 凡槍
 湯上りの浴衣で町を見て廻り 八百長
 腰帶のまんま出て來る風呂上り 吐露坊
 湯上りをチャリミ見たが初め 堤坊
 湯上りの爪立て取るシャボン箱 幸麿

○
 恍惚に離れ座敷の三味を弾き 蛙人
 柱 凡槍選

捨てられた女柱へ泣きに行き 遊郎
 追い詰めて柱登る油虫 洲馬
 帆柱の數で港は暮れて行き 雪峯
 電柱へ登つて子供意氣を見せ 八百長
 一べんは柱を楯に取つて逃げ 四迷子
 病上り柱迄來て息をつぎ 吐露坊

○
 人生を悲観するには壁があり 遊郎
 感傷の子は壁に寄る癖を持ち 同
 片壁は左官忘れた頃に來る 桂
 電工夫氣轉のきかぬ壁をぬき 幸麿
 ○
 すつくりと壁塗り上げた美しさ 遠柳
 忘れ物 堤坊選

白髪から先づ押し付ける床柱 凡槍
 壁 遠柳選

あの角ももう廻つてる忘れ物 遠柳
 忘れもの電話が汽車を追つかひ 蛙人
 驛員に笑はれてゐる忘れ物 洲馬
 永旅に女房にすまぬ忘れ物 八百長
 忘れ物次ぎの驛まで長い事 遊郎
 忘れ物巡査の意地の悪いこゝろ 四迷子

○
 忘れ物忘れた頃に持つて來る 堤坊
 西 瓜 吐露坊選

大西瓜八百屋の凝じ棚が落ち 洲馬

おいしさは皮へ喰ひ込む大西瓜
半分にして見て賞める大西瓜
叩かれた音で西瓜は賣れて行き
べっくく西瓜の種子は庭へ散

雪峯
凡槍
堤坊
幸磨

西瓜切る處へ久し振りの客
吐露坊

火 星 四迷子選

研究にこぎまる丈けの火星なり
多賀助

人間の箒は火星迄達はず
幸磨

望遠鏡ソコヒの様な切が見へ
幸磨

真中に火星が映る大鹽
吐露坊

人が居る居らんで火星騒がれる
吐露坊

説明をするに火星は骨が折れ
同

百五年破亂を投る見舞客
四迷子

嗜眠性腦炎 共 選

寝がたつたくで起きる嗜眠性
蛙人

嗜眠性近所は死んだものにする
幸磨

嗜眠性手の附け様がないと言ふ
多賀助
嗜眠性じやないか娘起される
八百長
博士ただ見たてるる丈けの嗜眠性
洲馬

遅日莊偶會

九月十六日夜

思案して通る烟は露に濡れ
葎乃

何をして居るのか烟人が居る
徹底郎

瓜烟忍びの型で探して居
同

茶烟のあれが仕事と思はれず
同

これもみな同じ烟を間違はず
馬行

本宅を建てて烟で狹ませる
同

烟から歸つて人の親こなり
同

烟から歸るに同じ道になり
同

御通過を知らず烟に汗をかき
松郎

喫付ける烟に話相手なし
同

烟から煮きに戻つたかやくめし
同

下駄膠きで踏んだ烟に影がさし
同

烟まで鳥居の審附のこまで来る
同

烟の中父の姿のありがたし
路郎

今見ればこればつかしの烟にて
同
お互に大人烟を通りぬけ
同
まだ烟瓜や茄子を作つて居
同
もう烟自分の夫ばかりなり
同

本社十一月句會

日時 十一月八日午後六時

場所 大阪市南區清水町停留場西入

端の坊

兼題「藁灰」五句 麻生路郎選

會費 貳拾錢

第六支部句會

日時 十一月二日午後一時

場所 六甲苦樂園松風亭

(阪神香櫛園阪急夙川下車北方)

兼題「別莊」五句 竹田蘆穂選

會費 貳拾錢

句會に出席したこのない方でも

御遠慮なくお出下さい。



選及び選者

(二)

麻生路 郎

第二 箇人選

ある特定の人に、その句の價值批判を一任することを、私達は箇人選と呼んでゐる。箇人選は多く、そのグループの先輩がするこののならしになつてゐるが、選する人の人格や、社會に對する知識の深淺川柳に關する研究範圍の廣狹等によつて、選まれる句風が餘程違つて來る。

であるから箇人選の場合にはその選者が、どんな選者であるかを一ト通り知つておかなければ、折角巧な、特異な句を作つ

ても、それ等の選者によつて全く闇から闇へ葬られてしまふ危険が伴ふ場合があるものである。

しかしながら、自己の句に對して充分に自選をなし得ない作家は自然この箇人選に一任しなければならぬのであるが、その場合には必ず相當信頼し得べき人に選を托さなければならぬでなければ自分の句の伸びて行方向の見分けがつかないことになるからである。

私は、自己の句に對して充分に自選をなし得ない作家は自然箇人選即ち先輩の選によらなければならぬやうに云つたが、さうでない例外的場合もある、例へば句會なごでお互ひが多數に集まつて作句した場合に、便宜上ある特定の人に選を一任することがある。これは選になれない人たちもませて互選するよりも比較的いい結果をうむことを知つたからである。

要するに箇人選は選者の如何によるものであるから自選よりも劣るものだとして否定し去ることは出来ないと思ふ。

第三 共選

共選といふのは、句會或は誌上において二人以上の特定の人達が同一句の選をなすことであるが、この場合には選者の選み方が如何に相異してゐるかが一目瞭然するわけで、單に出句者が教へられるばかりでなく、選者自らも教へられることが多

いものである。

この共選の方法には、共選者が選んだ句を合併して發表する方法で、單に同一句を選んだといふのみで個人選の同一形式とする共選の二種あるが私は後者の方が出句者も選者も共に参考になる點が多くてよからうと思ふ。前者に對しては單に二人以上の眼を通過するために特異な句に對して見落しが少いといふに過ぎまり、選者の側から云へば自己の共鳴し得ない句までが選まれて發表されるの缺點があるやうに思ふ。

選の價值に至つては個人選の場合と同様、選者の人格、選者の社會に對する智識の深淺、川柳に對する研究範圍の廣狹等によつて定まることは、いふまでもないであらう。

第四 互選

互選といふのは、句の價值批判をある特定の人に一任せず、出句者相互が選するのであつて互選の方法としては、

(イ) 席上互選 (頂戴選)

(ロ) 清記互選

(ハ) 誌上互選

の三種に別つてこゝが出来やう。

(イ)の席上互選といふのは、お互が會の席上で披講者をして設けて、これを讀みあげ、共鳴者は之れに「頂戴ッ」をさけびその頂戴数を短冊の上部に記して、頂戴ありしものをもつて新

聞紙或は雜誌上に發表する標準とする方法である。勿論この方法には多少の缺點を伴ふものであるが、他數の人々が集合して作句する會では比較的この方法が用ひられてゐる。

これを私達は頂戴選とも稱んでゐる。

(ロ)の清記互選といふのも、席上互選法の一様であるが、他數の句を清記して、各人に廻覽し、各選紙に自己の佳句を信する句を記して披講者に渡し、披講者は之れを發表して採點する方法であつて、選句に對して長時間を要すること、甚だしき手数を要するため、私達の川柳會では殆んどこの方法は用ひないことにしてゐる。

若し小集でも催される時には、この方法によられるのもよからうと思ふ。

(ハ)誌上互選といふのは、雜誌などで出題し集まつた句を全部誌上で發表し、番號を附しておき、各出句者に互選せしめるもので、これは遠隔の人達が誌上で句會をしてゐるのと同じ形であるから一寸面白い方法であるが、それ等の集句の中には随分いかゞしい駄句も多數にあるので、紙面に限りのある雜誌などでは、殆んど誌上互選なきは行はぬことにしてゐる。

席上互選の缺點は選句の標準が亂れること殊に頂戴選では調子によつてつりこまれること、深く考へなければならぬ句は往々落選することなど數へあければまだくあらう。(つゞく)

募

集

句

水

枕

(附水枕)

石井省 二選

溜息をして水枕 むきかはり 助六
 水枕 親展にある 封を切り 一柳
 水枕 廊下で振つてぶちまける 義矢満
 水枕 無理な暮しの愚痴が出る 馬行
 水枕 何にか知らぬが母に言ひ 薫流
 水枕 眠れぬままにうめいて居 三拍子
 水枕 便所へ行くに手を引かれ 劍呑坊
 水枕 母の白髪が急に殖む 松雨
 水枕 ほろびに目をしばたき 零骨
 水枕 さうにもならぬ息を吐き 輝翠
 水枕 いらなくなつて毛が抜ける 同
 水枕 ひつきりなしに人が来る 一休
 水枕 診に聞いて水枕を替ね 龍草
 水枕 晝寝が起きて替て居る 廣賀
 水枕 晝寝が起きたへる水枕 不越
 無遠慮な聲がこたへる水枕 紅怨子
 隣室のうめき寝られぬ水枕

水枕 書齋で寝ついたまふまふ 美濃守
 水枕 去年の事を思ひ出し 俊坊
 水枕 借りて子供の熱がこれ 香氣坊
 水枕 喰べたものを聞かれて居 雅幽
 水枕 額をそつこさはられる 十字路
 水枕 咳々妙な咳に成り 同
 水枕 裂ける程叩く夜店の水枕 鳶歩
 厄年を氣にし妾の水枕 凡平
 水枕 養子に金庫まかすなり 同
 水枕 院長をまち母を待ち 同
 水枕 玩具なんざに目もくれず 琴月
 水枕 博士無言に親を呼び 美の作
 一べんは水枕を逆さす(以下水枕)二舟
 咳らない水枕に眼がたかり 乾坤
 臨終に水枕はさけたまま 美の作
 (佳之部)

川柳書架(六)

漫畫川柳ふところ手

(麻生路 耶 著)

▼本書は『川柳漫畫懐手』の改訂版であつて初版は菊版半截で小出権重氏の装幀である。改訂版は書肆田村氏の希望で『漫畫漫文川柳ふところ手』といふ長い書名になつたのである。

▼例によつて凡例を左に記して見やう。

(一) 本書は私の人生觀、社會觀を川柳の形式を藉りて發表したものである。

(二) 不即不離の註解を試みたのは、川柳を全く知らぬ人が川柳を理解する上に助けともならばこの微意に外ならぬ。従つて本書は川柳の入門書ではない。

(三) 作品は明治大正にかけて、番傘、新柳眉集、ツバメ、風、土雲子、商業之大日本、讀賣柳壇、毎日柳壇、朝報柳壇、日日柳壇等に發表したものの、中から選ん

水枕髪をくすして瘦を見せ 寸馬
 水枕義理に従妹はついて居り いさむ
 水枕御籤の話少し聞き 義矢満
 女客に眺みせて居る水枕 劍呑坊
 言ひ過す事を知つてる水枕 零骨
 八疊にひきりきり寝る水枕 輝翠
 水枕干して近所へ禮に行き 一休
 寝返りをうつて咳こむ水枕 紅怨子
 井戸端で水枕から尋ねられ 俊坊
 同僚に届けを頼む水枕 香氣坊
 水枕ひきは残してをく氣なり 十字路
 水枕妹に指輪やるさきめ 凡平
 水枕氣の好い亭主よく動き 美の作

(選後に)

同想類句に就て意見を申陳へ度いのです
 が目下病中なので爰に例句を示しまして
 今後の御投句中に對する御參考に供し御奮
 發を望みます要するに(一)自己の句を最
 も深切に見つめる事(二)而て自己の句を
 遠慮なしフルイにかける勇氣がなくては
 なりませむ、そうでないさ徒らに平凡な
 表面觀察に墮し十人並百人並の句が出來
 て集めると類句の多いに驚かされます
 序に例を御覽になつて聲調の研究に思ひ
 を寄せられむ事を希上げます

水枕自分で替る程になり 輝翠
 水枕ひきりで替へ程になり 夢六
 ○
 水枕二人がかりで替られる 俊坊
 水枕二人がかりで替るなり 月の輪
 水枕二人がかりでやつこかへ 美の守
 水枕替へるに二人の手が掛り 一休
 ○
 水枕寢返りらしい音がする 寸馬
 水枕寢返りをした音がする 凡平
 水枕寢返る度に音がする 月の輪
 寢返りをうてば波うつ水枕 輝翠
 ○
 水枕寢不足の手で替へられる 一休
 寢不足の目で水枕替つてやり 輝翠
 ○
 水枕今来た客へ目を開き 雅幽
 水枕見舞の方へ顔をむけ 不越
 ○
 母親を困らせて居る水枕 一柳
 水枕母を困らす無理を言ひ 夢六

だ、それに未發表の新作をも加へて置いた。

(四)本書は再版を機曾に菊半蔵を四六版に改めた。さうした方がよくなるだらう、發行所から注意があつたのでそれに従つたのである。外に理由はない。装幀は自分でやつてみた。漫讀はすべて畏友柴谷柴舟氏の手を煩はしたものである。

▼本書の内容は、路郎氏の顔(柴舟寫)挿繪二葉(凸版)自序、再版に就て、凡例、句漫又漫讀。

▼大正十三年六月五日再版發行。四六版二〇一頁、定價一圓二十錢。發行所は大坂市東區南久太郎町四丁目田村書店。因に初版は大坂市西區北堀江通一ノ二、柏原奎父堂である。購讀希望者の便宜上川柳雜誌社でも取次ぎをしてゐる。

▼肩の凝りぬ讀物として絶好の書であるから川柳を知らぬ人にもおすすめるべきが出来る。

▲竹馬居句屑

石井省二

郊外に住むで隣りは博士なり

親方は極道ゆくの床屋にて

拂子の釘にさがる係の手

いつこくな養子前垂かけてゐる

梅幸の家の前まで連れになり

番頭のストン節に足がつき

吳佩孚の片腕なるひけが延び

提灯で手の筋鬨星さゝれてる

前東京市長永田青嵐先生へ

ドクダミを鉢植へにして記者をまき

白蓮女史の新家庭

女房が歌の上手でやつこ生き

庭の糸瓜四尺を餘す子規忌を

營むの日持病に苦しむ

長が絲瓜喘息持ちの餌食なり

立廻りの柔道化に成功せし新國

劇の分裂す澤田氏に目先きのか

わつた一句を贈る

斬合は七三八来てダンスをし

遺言を言ふ程でない水枕 輝翠
遺言をする程でなし水枕 松雨

明けくれに天井見てる水枕 不越
天井をつくづく見てる水枕 翠月

井戸水の親切うける水枕 十字路
水枕井戸水貰ふ日に三度 いさむ

うれしさはもう水枕干してあり 松雨
床拂俱に干しててる水枕 呑氣坊

座布團を二つに折つて上へのせ 山月
水枕低い座布團二つ折り 三拍子

白い腹見せて燕は跡戻り 助六
廣告の燕キツパリ尾が分れ 義矢満

巢へ燕追ひかけられた様にくる 久樂
ステッキを燕は軽くよけて飛び 馬行

燕

水枕二階の屋根へちつこ減し 俊坊
二階借り屋根へ枕の栓をぬき 山月

戀人の名を水枕呼びつけ 夢六
水枕夢うつにも名が呼ばれ 美の作

水枕替へて附添ひ居眠りし 龍草
水枕替へて母親風呂に行き(佳) 助六

水枕替へて看護婦晝にする 助六
見舞客水をかへて歸るなり 村夫

お見舞の序に替へる水枕 松雨
我が事のように替へてく見舞客 竹榮

水枕かへるに見舞の手を借りる 不越
せく用があるこも見ぬ燕なり 東成子

つき當らずに燕か我れを越ぬ 三拍子
ぶつつかる様に燕はこんど来る 劍呑坊

白石維想樓選

宿替をしたこは燕まだ知らず 輝翠

宿替をしたこは燕まだ知らず 輝翠

さんで来た燕はつこ思はせる
い年の通り之鳥に軒に来る
片先きを燕が抜ける場末町
俄か雨燕も同じ様にぬれ
ほんやりこする頃燕訪れる
入口で燕三燕すれちがひ
燕の巢時は過ぎ行くこも見えず
盗泉

半襟

洲馬選

仲好しが同じ半襟かけて居る
買った襟妹の肩へ掛けて見る
襟買ふに心齋橋を行き戻り
半襟を女房ついでの様に見ひ
半襟へ傾け過ぎた揮發油
半襟の紅が氣になる年になり
半襟を買うに妹連れ出され
半襟の柄は丸のて掛けて見る
説明をして半襟の刺繡を見せ
半襟や吊るした襟に風を見る
半襟の値段段亭主を驚かせ

柳から柳へ燕飛ぶ繪なり
所澤燕にされる鮮かさ
燕の巢は其儘で店普請
日記張燕歸つたこも書き
今行つたこも燕は引き返し
田植笠燕の方も忙しさう
竹田川洲馬共選

柳田川洲馬共選

半襟を出して見せるも娘にて
下された半襟柄が氣に召さず
半襟や矢鱈に貰て如才なし
半襟に付く白粉が氣にかゝり
半襟をコートの下に少し見せ
半襟の柄にも内氣見せる姉
忙い中にも半襟かけかへる
襟の柄選る妹のませた口
半襟を買うに肩にかけ腕に掛け
半襟を見くらべて居る舞臺裏
襟かける女房を亭主せき立てる
半襟の贅寶石をちりばめる

餘白片言

私が前號で自選といふことについて一寸書いた、それがたのめかさうだか知らぬが、その後、自分等は全然他人に選をして貰ふことはいやだ、めい／＼自選でなければいかぬ、雜誌へも、勝手なことをかきさへすればいいのだ、他人の迷惑なきは考へて居られぬ、だから自分で雜誌を出さねばいかぬといふ結論に到達してゐられるやうであるやに聞いたが、若しそれがほんまだミスすれば誤解誤謬なきやうにのぞむ、自選といふことは、どんな場合にも必要であるが友人や先輩の選をうければ更に教へられる點があるものであるから、さうした極端な決量を示さず出来るだけ川柳研究のためには、ひろく読み、多く作り、先輩の指導もうけるやうにしたいものである。古川柳に飽きて来るころにはそろ／＼自分の句よすぐれた句はないやうに思ふものであ

半襟の柄が大きい雛妓なり
村夫
襟の紋河内家はんぢトのろけ
美の作
他所行ミ仲居朝から襟を掛け
同
福引の半襟派手なのがあたり
寸馬

(人)御見立ては誰さ旦那に襟の禮
美の作
(地)半襟屋内から見えぬ程に
輝翠
(天)半襟の輪から常掛一ツ選り
寸馬

半襟を氣にして急な旅に立ら
洲馬
半襟の柄を見つめる膝枕
輝翠
半襟へ亭主の批評鋭過ぎ
東城子
半襟を變へて彼の女は婿に來る
紅怨子
半襟の中に母娘が少し揉め
雅幽
半襟を迂散な男買ふて去に
義矢滿

半襟を貫うた義理も少しあり
松雨
襟に顎理て思ひあまる事
紅怨子
新しい半襟で又嘲笑され
竹榮
半襟をねだる位に雛妓押れ
美の作
泣いてゐる子に半襟の派手す
琴月
半襟の垢が氣になる銀座の灯
盜泉
半襟の値段亭主を驚かせ
月の輪
(五客)半襟の柄へ洋装眼も呉
雅幽
襟の柄撰む妹のませた口
紅怨子
半襟の土産に意味の深いこ
松雨
半襟の色にも春のやわらか味
乾坤
半襟の次ぎは指輪をねだられる
琴月
(人)半襟を囓る舞臺が凄ふなり
義矢滿
(地)半襟を褒めた心を慶まれ
瀧草
(天)半襟の柄にも内氣見せる姉
乾坤

◆ 實話 一

美の作

東京は相變らずよく餘震がある。母親あ
わて、子供を抱へて表へ飛びで出るミ、
子供其肩につかまり乍ら三日月を見上げ

て。
御母ちゃん空を御覽よ。ひびひ地震で御
月さんが半分に缺けて落ちちやつた。

る、否、自分の句すら満足し得られない
ものである。そんな時に、その作家は向
上三墮落の岐路に立つてゐるのであるか
ら尤も危険な時である。句に覺醒したや
うに見ても文字の技巧のみに走つて矢
張り新傾向句の模倣に過ぎない人を往々
見うけるがこれ等は所謂一人よがりであ
つてもう少し先輩の言に耳をかたひける
必要があらうと思ふ。しかし、私は樂々
ミ作りつばなしにしてる作家の句をよ
むよりも、自己否定に陥るほご作句に苦
しんでゐる作家の句を見るミ、たまらな
く快味を感じ敬意を表するものである。
私が「選及び選者」をかく氣になつ
たのは、川柳家ミして、一ト通り知つて
ゐて貰ひたいこゝを、ほち／＼書き出し
たのに、過ぎないのであるから、私が書
かなくても、既に知つてゐられるこゝの
多くがあらうミは思ふが、右は全く川柳
入門書を作る草稿だミ思つて譽んで、貰
ひたいのである。(路)



質疑應答

遅日莊主人

一白生といふ人から次のやうな意味の質疑がありました。

『私は川柳家ではありませんが川柳の愛好者ですから、私と同じ世に生れた作家の所謂新川柳を見た時に直に共鳴し、面白く感ずるのが當然だと思ひますが、さうした譯か古川柳に味だけの感興を催さず、寧ろ、何だ話らない感ずるのはさうした譯でせうか。例せば『川柳雜誌』の第八號の『戀さまざま』にあけられた古句のいづれを見ても、いつもこり／＼面白く思はれ、思はず微笑を禁ずるこゝが出来ないのに、現代の句に對しては一句だに何等の面白味も感じないのは、さうした譯でありませうか。

これは私の頭が陳いたためでせうか。若

し愚生の川柳を解さざる者であるとするなれば、同じく古川柳も面白くない筈であると思はれますが如何でせう。若し今の世の川柳が主観とやら（？）にて川柳作家以外の者に見せるものでない云はれるのであれば又何をか云ひませう云々。成程川柳の愛好者につて尤もな質疑であります。これは單に一白生一人の質疑でなくて、世間には一白生と同じ疑ひを抱いてゐる人が澤山あるやうに思ひますから誌上で簡單にお答へして一般の参考にもして見やうと思ひます。これをお讀みになつてなほお判りにならぬ點があれば住所をお知らせ下されば、更に所信なり、面談なりして説明いたしませう。貴下のやうに川柳の愛好者であつて川

柳の作家でない方は世間には澤山ゐられます。そして、それ等の川柳愛好者が矢張り貴下と同じやうに古川柳の愛好者であつて、現代の句に興味を感じない方も澤山ゐられます。

それは貴下の川柳に對して興味を感じられる範圍の狭いことを語つてゐられるのであつて、假へて云へば貴下が小説家ではないが小説の愛讀者であるとする、そして馬琴の『八犬傳』や西鶴の『一代男』や春水の『梅曆』や其の他のこれを読んでもいつもこり／＼に感興が湧くのに、現代の小説のこれを読んでも、ちつとも面白くない、何んだ話まらない日常茶飯事をだら／＼書いて、これが小説であらうか云はれるのと同じだと思ひます。

私から云はせれば、八犬傳も、梅曆も一代男も、何れも小説として實にうまく描寫されてゐて、こり／＼に興味をもつて讀破することも出来るが、現代の小説



川柳塔

松本助六

國の事話せば仲居知つて居り
 土砂降りのごむ靴中の水の音
 我が家の様にめしやへ戻つて來
 子澤山師がミルクを合して居
 重ね着に襪の調子ちみかはり
 立關で靴はも一度尻をつけ
 組板の傷まだ淺くたのもしく
 三越が來てる田舎の十三荷
 出雲屋を不雅不性になつて出
 手内職よつほぎ貯めて母は病み
 尻落ち付ければ貸して遣る金あり
 安東縣歸る聲をみ消す臺所
 まで行つて兄弟の肩

關本雅幽

(前頁より續く)

である漱石の『明暗』でも「こゝろ」でも「我が輩は猫である」でも、一々あける譯にはいかぬが、其の他の小説家のいろ／＼な作品を讀んでもさり／＼に興味をもつて讀むことが出来るのであります勿論これはすぐれた作品に對していふ言葉であつて、昔の小説だつて今の小説だつて拙いものに對して面白味を感じる譯にはいかないのです。この言葉は川柳に於ても同様です。そして昔の小説に描かれた人物は普遍的でありませんが、現代の小説では人物個性描寫に極力力をつくしてゐますやうに、古川柳も新川柳の間にもさうした觀方で一讀されたなれば充分にうなづき得られることと思ひます。

次に『川柳雜誌』の八號にかいた「戀さまん」の句で古句と現代の句との味はひの相違から云へば、古句は、天麩羅や牛肉やかしわや鰻の料理の如く數に於て多くの人達に愛好せられる性質をもつて

妓丁の帽子冠るはわが用事
叔父さんが嫁を御持った大
師講
御前はのちやない年寄尻を
拭き
言はんこつちやない年寄尻
を拭き
菊畑踏みわけけて行く御隠
居所
高橋かほる

畫下り屑屋一冊抜いて讀み
白手ルの腰巻見せる若い衆
何所やらに水音のするすゝ
也
宮内一洲

起重機は釣瓶のやうに荷をおろし
菊一が揚れば鳴門渦を巻き
來客に娘は皮の棄さころ
膳立が出來てお内儀あらたま
哀れなり形見遣す植木鉢
氣まぐれに巡査履をはきたがり
巻煙草ぬけば一本利子がつき
岩崎柳路

講演會に未來の事も聞かされる
郊外の煙突風呂屋見つけ出し
震源地の事で博士にもめが出來

る句だも云へるでせう。それに反し
て現代人の句はスツボンや、湯葉や、蓮
根や、酒盜や、山葵や、アスパラガスな
ぎの如く、特種の味はひをもつてゐるの
で、世間の牛肉や鰻をうまく感ずるほ
に感じられない譯なのであります。し
かし、天麩羅や牛肉はうまいには違ひな
いが毎日食つてゐれば飽きが來ます。
そこでいろ／＼變つた味のするものを愛
好するここになるのであります。貴下が
川柳の所謂愛好者から一度川柳の作家の
域へつき進まれたならば、古川柳のいい
句はいいに違ひないが、古川柳の眞似を
したやうな句ばかり作ることに不満を感
じられて新しい境地を見つけやうとされ
るであらうと思ひます。「川柳雜誌」は
川柳を社會に宣傳することに初心者指
導するこの使命をもつてゐるので、古
川柳でも巧な句は紹介いたしまして初
心者の興味をそれ等からも感じさせやう
とミしてゐるのであります。貴下が今少

文部省文化村コートが出来て賑わせる
 パラツクに臨む様な電話設け
 本部屋の時計はほうも無い時間
 森田輝翠

○ 退屈を凌ぐに雑誌かたすぎ
 眞實をあかせば君は逃げだろ
 締め切つた心になつて寝る日なり
 雨洩りを来た家主世辭がよし
 信で詣れば香具師に目をくれず
 後添はまた教わても教わても
 釘付けの様にも見へるお茶の席
 跳ねつけて銀主の氣にかへり
 太田徹底郎

○ 孝行な息子に見ゆる葉書が来
 繪硝子の間に沖の舟が行き
 長煙管磨いて軽く吸ひつける
 尤もな話して巡査思へきも
 黒木 莢 豆

○ 孟へしむみりさしたものを注ぎ
 極道でもしてゐるやうに母へ書き
 貸したものをさるやうに赤兒泣きたてる

し古川柳を讀破されたならば必ず古川柳の多くに飽きたらぬ點を發見されて、現代の句に對しても興味を感ぜられる日の來らこを信じて疑ひません。

料理の例はあまりに手近なものを選んだために、いさゝか安つほく感ずるの嫌はありますが、私のいふ要點は句の内要が漸次進化して行けば普通人では感じられぬ程度までも進んで行くのは萬止むを得ないものだといふのです。天麩羅の味よりもアスバラガスの味がすぐれてゐることは云へないが、天麩羅の味はいゝが、アラバラガスの味はきこがいゝかこいふことは、そのものゝ味を感受し得る人の趣味性の範圍の廣狭の差だといふのです。だから現代の川柳にいたしましても川柳作家以外の人に見せぬものでもなんでもありません。味はひ得る人々には誰にでも見せるのです。いや誰にでも味はつて欲しいのです。けれども味ふ方でも味ひ得る素質を養はなければ一生その味

行くこの町も教へたい、車掌
一、下言を聞きもらしたる給仕なり

○ 竹田 芦穂

きつぱりミ待たせ、文關番這入り
母親の情を思ふ頃、こなり
此の暮の俺が、案山子に似てるのか
誰吐るにもなく、巡查追ひらし
金の世に見切を付けて暮したい
腕時計、屈托のない腕に見せ
笑はれるだけの世間を皆おそれ
長男の行儀、弟は見習はず
バレットへさてまゝならぬ色ばかり
愛の戀のミ結局は申されず
俺の氣を知つてか、斧が竹を割り
強震に柱時計を見らる度、胸
十徳の後姿が、淋しすぎ
肺病にめつきり友の減つたこ

地下室へ降るビールを飲んで來る。寸馬
雨の降る港の夜は静かなり、眠聲
凱旋に港俄に湧き返り、輝翠
氣の引けるものを干てる子澤山、零骨
紫陽花の影に駒下駄腹を見せ、一洲
エレヴェーター思はず嫁へするなり、秋葉
刈込みの松から洩れる著音機、同
さう見ても流球人さ、いふ姿、歸月

社 告

また發行がおくれました。愛讀者諸君の
ために甚だ遺憾にたへぬ次第ですが、今
しばらく御辛棒願ひます。遅れた第一原
因は大阪日々新聞社主催の川柳大會のた
めに數日間を費したのミ、第二の原因は
印刷所の秋季運動會があつたためです。
印刷方面に御關係のある方は御存じでせ
うが、運動會があるのは一日ですが、大
いに愉快になりすぎて連日の缺勤者が出
たりするので、本社もその影響を蒙つた
わけです。自分で印刷所をこしらへても
これは助からない原因ですから、不忠願
ひます。



編 輯 後 記

●作句のシーズンになりました。種々變つた面白い句會が催されてゐます。句會のたびに新しい方々が出席熱心に作句されることを嬉しく思ひます。先聲諸氏の努力の効が漸く現はれて來た譯です。川柳全盛の時期も遠くはありますまい。

◆本誌の爲に創刊當時より活躍を續ひられた酒井零骨君病氣のため醫者の勧告もあり同人を退かれました。據つて第三支部は太田一聲君擔當に變更し第六支部は六甲苦樂園に移し今度新しく同人として入社されました佐々木誠闇氏の勞を煩はすことになりました。兩支部の發展に零骨君の病氣全快を祈ります。

◆新進作家高見柳骨 竹内多聞氏同人として入社されました。

◆十月一日は第十三支部(平野郷)十月九日は第八第十支部(神戸)聯合句會がありました。何れも盛會、會報は次號に廻しました。

◆本社主催柳翁忌九月廿三日を端の坊で営みました。紙面の都合上、會報を次號に廻しましたことを遺憾に思つてゐます

◆會員岡澁湖君は爲歩ご改號大いに活躍すると言ふこと、御記臆願ひます。

◆川柳に尤も熱心な塚崎松郎君外同好者三四相寄つて左記の處から『灰』と言ふ雜誌(句本位)を出版されるさうです。郵券二錢お送りになれば、送本されるさうです大阪北區上福島北二の五四森田旭要方

◆伊志田孝三郎氏は『商店雜誌』で現代川柳詩を募集して居られます。東京市淺草區駒形町四二商店雜誌社宛のこと

◆青明忌句會の下記二句は凡牛氏の句でないこと通知がありました。作者はお知ら

せ下さる。一植木棚屋根から撒くにちみ足らず、遺海を干に女房は屋根に出る

◆大阪日日新聞社主催川柳大會が六甲苦樂園大觀樓大廣間で開催され近來になり愉快なる句會をいたしました。詳細は既に新聞紙上にて御承知のことと思ひます市内の會場も異り作句はせずとも此の景色を眺めるだけでも足を運んだ勞は構はれると思ひます。同園内松風亭に別稿の如く第六支部句會が近日間かれます。是非御參會をお勧めします。

◆既報いたしました『きやり』復活號がいよいよ出ました。

◆『大阪』は同人解散して本田溪花坊氏の箇人雜誌になりました。今後は單に川柳にこまらず同氏の趣味中心に編輯されるさうです。

◆京都川柳家西山富士子君が九月二十一日にじくなられました。哀悼の意を表します。

◆私は病氣の爲久しく會員諸氏の期待に反いてゐましたが昨今病氣も全快いたしましたから、大いに働いて見たこと想つてゐます。(青徳生)

一周年記念號 (第二卷)
第一號

原稿を募る！

別稿募集題課の外、左記原稿を募る

▼川柳家失敗談 編輯局選

川柳家失敗談 は自分の中でも、他人の中でもよろしい。文章の長短は制限しませぬがなるべく短かくて面白く讀める範圍のもの。掲載した分に對しては全部薄謝を呈します。

記 念 號 は増頁して出来るだけうれしい雑誌にしたいと思つてゐます。そんなものになるかはよく蓋をあけろまでお預りごいたしておきます。

川柳雜誌社編輯局

讀 書 子 に 告 ぐ

- ▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。
 - ▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。
 - ▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知つた人です。
 - ▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。
 - ▼本をむさぼつて讀むころになりました。
 - ▼道頓堀邊へ御出かけのせつは是非立寄つてあげてください。
- (路 耶 生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

句稿は別紙に認め、住所氏名を明記するこゝ。

書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記するこゝ。

締切は厳守されたし。

各地會報は清記のこゝ。

用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

投稿其他につき御問合はずべて返信封封入のこゝ。

募集

第一卷第十一號課題

十月二十五日締切

(各題二十句以内)

▲掛取

▲山

▲梯子

一周年記念號(二卷)課題

十一月二十五日締切

▲金庫(二十句以内)

▲松(同)

▲店先(同)

▲弟(同)

▲旅人(同)

▲牡蠣船(同)

每號募集

▲近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選

▲各地柳壇(會報) 編輯局選

▲文章(評論研究吟行漫文)

定價

一部 參拾錢
六部 壹圓六拾錢
十二部 參圓(共稅郵)

廣告料

特等一頁 參圓
普通一頁 貳圓
同半頁 壹圓
五號一行 貳圓
拾拾拾圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中であり頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年十月十日印刷

大正十三年十月十五日發行

第一卷 第九號
(毎月一回十五日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

印刷所 藤本兄弟社
大阪市東區農人町二丁目七番地

發行所 川柳雜誌社

振替口座三一五一四番

賣捌書店
(大阪) 明文堂 百足屋 公立社
(東京) 東條 (京都) 三宅 (神戸) 米田
(金澤) 石井 (松任) 三須 (函館) 石塚

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹 麻生路郎

岩崎柳路 原史松風
橋本二柳子 西垣松雨
龜井花童子 吉川啞人
太田一聲 太田徹底郎
高橋かほる 高橋古城山
高見柳骨 竹田蘆穂
武田彩霞 竹内多聞
宗清夜調 黒木莢豆
柳川洲馬 松本助六
駒井美の作 麻生葎乃
佐々木黙閣 宮内一洲
森田輝翠 關本雅幽

支部所在地

第一支部

大阪市西區八條通南小路
幹事 橋本 二柳子

第二支部

大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇
幹事 森 田 輝 翠

第三支部

兵庫縣武庫郡四灘村河原東五九〇
幹事 太 田 一 聲

第四支部

大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方
幹事 關 本 雅 幽

第五支部

大阪市東區俱差町二一番地
幹事 駒 井 美 の 作

第六支部

兵庫縣武庫郡六甲苦樂團
幹事 佐々木 黙 閣

第七支部

大阪市外南濱一八二
幹事 西 垣 松 雨

第八支部

神戸市旭通二丁目八三
幹事 宮 内 一 洲

第九支部

山口縣山口町石原小路
幹事 柳 川 洲 馬

第十支部

神戸市中山手通二丁目九五
幹事 武 田 彩 霞

第十一支部

東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内
幹事 岩 崎 柳 路

第十二支部

函館市青柳町五〇
幹事 龜 井 花 童子

第十三支部

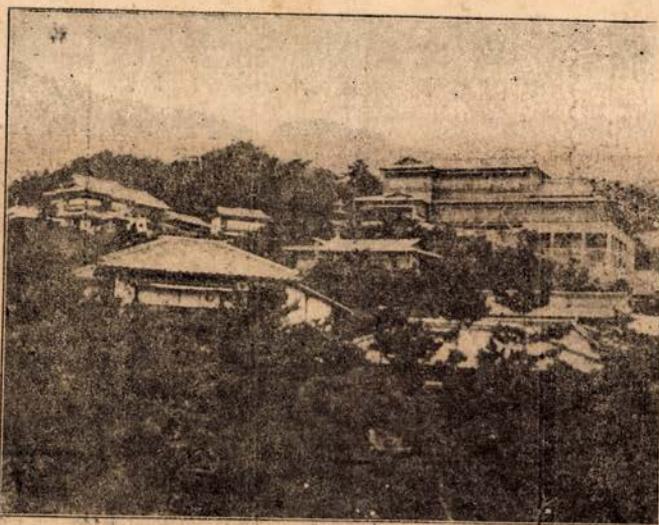
大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目
幹事 松 本 助 六

本社幹事

蘆穂、葎乃（編輯）啞人、古城山（宣傳）二柳子
（會計）一聲（廣告）莢豆（寫真）

秋の六甲苦樂園

松茸狩に
蟲を聴きに



大觀樓には大宴會の場設備があつた

秋やかな一日の行樂に好適の地、ラジ
ユーム温泉は阪神別府の稱があります。
園内から紀淡海峽が手に取るやうに見
えます。

六甲苦樂園

大觀樓

電話西宮一〇一

長春樓

電話西宮一〇一

松雲館

電話西宮一〇一

▲阪急夙川、阪神香櫛園から自動車の便があります。

(十分間)

定價 三拾錢

大正十三年三月三日第三版發行
大正十三年九月九日第四版發行
大正十三年九月十五日第五版發行